

氷将レオンハルトと
押し付けられた王女様

柏野すばる

SUBARU KAYANO



ノーチェ文庫



エリカ

カルター王立大学で
火薬の研究をする博士。

ジュリアス

カルター王国を治める若き国王。
いつも妹のリーザを気遣っている。

セルマ

極北レヴォントリ族の若い巫女。
一族が祀る氷神に仕え、
不思議な力を持っている。

ヴィルヘルム

リーザの乳兄弟。
カルター王立騎士団に所属する。
リーザを護衛すべく
彼女のあとを追ってくる。

leonhardt

辺境にある国境を守る
警備軍の総指揮官。
氷の如く冷たい容貌から
「氷将」の異名がつく。
どういうわけか突然、国王に
リーザを託されて——？

リーザ

カルター王国の末席の王女。
愛妾の子で城の片隅で暮らす。
大好きな研究に没頭していたが、
国王である兄の計らいで
leonhardtのもとへ嫁ぐ。

目次

氷将レオンハルトと押し付けられた王女様

書き下ろし番外編

未来の欠片

氷将レオンハルトと押し付けられた王女様

第一章

「お前は私の妹、リーザをどう思う」

国王陛下に問われ、私、レオンハルト・ローベンベルクは言葉に詰まつた。

「リーザ殿下、でございますか」

「可愛いとか優しいとか、美しいとか」

なんだこの質問は。仮にもここカルター王国唯一の国境を守護する『氷将レオンハルト』に向けての問なのだろうか。私にそんなことを聞いてどうするんだ?

私は動搖して、国王陛下の麗しき紫紺の瞳から目をそらした。

「うーむ、リーザ様ですか」

答えにくい。国王の実妹でありながら、いまだに嫁のもらい手がない姫。

趣味が爆弾作りだということだけは、知つていて。が、知つても理解はできない。

その話にどう反応すればいいんだ。

地下牢などの安全な場所で作業に励んでください、とでも申し上げればいいのか。

「いやあ、私は御免ですな。あの手の娘御は。

思わずそんな言葉が口から出そうになつた。

いや、ダメだ、こんな答えでは。

「いいところもあつたはずだ。顔が綺麗とか、ほかにも……顔だけは綺麗とか……

「美人ですね、非の打ちどころもなく」

「そうか、君の気持ちはしっかりと私の心に収めた」

「国王陛下がとろけるようなほほえみを浮かべてうなずいた。

「どんな気持ちを、ですか?」

「リーザを美しいと言つてくれた、お前の優しい気持ちをだよ」

私は、我が国最強の論客——すなわち陛下が語る話の続きを、固唾かたずを呑んで待つた。

「ああ、レオン」

真っ白な手袋に包まれた手を胸に当て、夢を見るような目をして陛下が言つた。

「君の優しさに心からの感謝をささげよう

——来る! 陛下の無茶ぶりが来る!

これはまたとんでもない一撃が飛んできた。

いやいや、これは。面白い、ハハハ。正直に認めよう。動搖して手が震えている。

「リーザをローベンベルク家に降嫁させると、正式に決定した。ははっ、感動で声も出ないか」

「わ、私の意思は？ 私の意思を、確認してない、陛下、恐れながら」

「やばい！ 声が裏返った！ それ以前に、ちゃんと話せてない！」

「……リーザが爆弾ばかりいじつてているから、『危なすぎる』と苦情が殺到してな。兄である私は、貴族院のお偉方に烈火のごとく説教され、リーザは座敷牢に軟禁されてしまった。お偉方は『リーザ姫はずっと座敷牢に閉じこめておけ』と言っている」

陛下は自分の都合だけを並べ立て、大きくため息をついた。

うるわ
麗しいお顔には、疲労がにじんでいる。

——皆様の言うとおり、座敷牢に閉じこめておけばいいじゃないですか！ なんで私がそんな姫君を押し付けられるんですか！

もちろん、そんなことは口が裂けても言えない。
でも嫌だ。そんな変人姫を押し付けられるのは、嫌だ。

「お前も四十だろう。年貢の納めどきだ、レオン」

年貢の納めどきくらい、自分で決めさせてくださいよ！ なんで陛下が決めるんですか！

「お前は、私に忠誠を誓つてくれたはじめての騎士なんだ。信用しているんだよ」
陛下は、よよよと目頭を押さえた。

今度は泣き落としか！ くそっ！

私は相手に泣かれてしまうと強く出られないのだ。弱点まで完璧に把握されている！
「おめでとう」

「な、何がです」
「結婚、おめでとう。お前の花婿姿が見られるんだな、嬉しいよ」

国王陛下が涙をじしませて私にほほえむ。
だが嘘泣きなのは丸わかりだ。

「陛下、あの、陛下、お慈悲を……。私は、まだ結婚なんて……」

押し付けられてまで結婚なんかしない！ 私はこの二十年、仕事一筋でやってきたん

だ。今結婚して、この国の守護という重責をおろそかにしたくはない！

そもそも私が四十歳まで独身でいた理由は、認めるのもせつない話だが、多忙で婚期

を逃したからだ。しかし独り身だと仕事に集中できて、むしろいいと思っている。

いや、負け惜しみなどでは断じてない。そもそも私には弟が三人、妹も三人、甥姪に至つては三十人近くいるのだ。自分の子に爵位を継がせたいという願望はないし、優秀に育っている甥がいるから、彼にあとを任せようかと思っている。ゆえに、跡継ぎの問題もないのだ。

「君の母君、極北の大巫女おおみこであらせられるミラドナ様にも、すでに許可はいただいたなんだと、陛下はあるの鬼ババ……ではなく偉大なる我が母君にまで、手を回していたのか！」

「ほら、息子をお願いします、ありがたいお話感謝しますと、一筆いたいたよ」

陛下が得意げに取り出したのは、間違いなく我が母の筆跡による『結婚立会人の書面』。

い、いつの間に……！

陛下はどうしてこんなに策士なのだ！

そういうえば、陛下は去年の北方駐留軍の予算枠をどうやつて拡大なさったんだろう。貴族院の面々は、『軍にこれ以上の予算はつぎこめない！』って喚き散らしていたのに、翌日には予算が一・五倍になっていた。

怖い。頭がよすぎる国王陛下に、口で勝てるわけがない。

あと母上！ まず、息子に一言断つてくれ。

いくら独身のまま四十になつたからつて、焦りすぎだ！

「取り急ぎ誓約書に一筆もらえないかな、早く話を進めたい」

「あ、ハイ」

「ああ、口が……口が勝手に「ハイ」って言つてしまつた。理由は簡単。逆らう気力が尽きたからである。

こうして私は、二十三歳の厄介者……ではなく、麗しき王女殿下を娶ることになった。



わたしは、カルター王国の末席の王女、リーザ・カルター。

そしてこの国の国王陛下は、わたしのお兄様。

妾腹しょうばくの子だったわたしたちは、お母様が早く亡くなり、お城のすみっこで生きてきた。

お兄様が王様になれたのは、正妃様の子全員がお姫様だったから。

実は、五年前にお父様が突然亡くなるまで、次の王は正式に決まつていなかつたみたい。

この国の王位継承権は、もちろん正妃の子が優位だ。だから当然、王位継承者を決め
る際には、異母姉様のだれかが『女王』になるべきだ、という声が多くた。

けれど、どの異母姉様も『国の舵取りなど無理です』と辞退された。お姫様として優
雅に幸せに育った異母姉様たちは、王になるための勉強をまったくしてこなかつたから。

それで五年前、当時二十二歳で政務を手伝っていたお兄様に、お鉢はちが回つてきたり。い
以降お兄様は、日々仕事に追われている。それはこの国がお祖父様の代の失政で傾き
かけているせい。お父様は命がけで國を立て直そうとしたものの、再建は完全にはうま
くいかなかつた。その負債を背負わされて、お兄様は『貧乏くじ王』なんて陰口を叩か
れている。

亡くなつたわたしたちのお母様は、異国からカルチャーの大学に留学して理学を勉強し
ていたそうだ。賢くて、向学心に溢れた女性だったと聞く。そしてお父様の目に留まり、
愛妾あいしょうになつたあとも、いろんなものをお城の塔で作つていらしたんだつて。

お兄様いわく、お母様はいつも優しく明るい人だつたそ。顔も覚えていないけれど、
自慢のお母様。

お母様に似たのか、わたしも計算や理学にはちょっぴり自信がある。侍女には勉強よ
り、女の子らしく刺繡しじゅうやダンスを学ぶべきと言われていたのだけど。

だからわたしも何かをもつと勉強してお兄様の助けになれないかつて必死で考えていい
たある日、部屋にいると、庭のほうから声が聞こえた。

「もっと質のいい爆弾ばくだんさえあれば、鉱山の採掘作業がはかどるのになあ」
「ローゼンベルクの新しい鉱山か。大雪の山岳地帯じゃ苦労するわな」

思わずバルコニーに出て手すりから身を乗り出すと、わたしの耳に話の続きをがはつき
り届く。

「結局、除雪がてら手で掘るのが一番早いんじゃねえか？ きつい仕事だよなあ」
「火薬を作るのは難しいらしいからな。今、どの国もこぞつて火薬の研究してゐるんだろ
う？」

男の人たちの声は、そのまま遠ざかつてしまつた。
気づいたら、わたしは指の色が変わるくらい強い力で、手すりを握りしめていた。
もし火薬の研究が進めば、お兄様の取り組んでいる交通整備のための掘削作業もどん
なに楽になることだらう。

そのとき、ひらめいてしまつた。

——わたしが爆弾を作ればいいんじゃないかしら、つて。
お城には山のように本がある。

その中に、爆弾の作り方が載っている本もあるはず。

わたしはいつも、お兄様から「思いつきがズレている」と怒られる。だけど、一度好奇心を感じたら、なんと言われても、思い留まれない。体が勝手に動いてしまうから。

爆弾を作ろう。そう思いついたあの、わたしの行動は早かつた。

「乳兄弟のヴィルヘルムを護衛代わりに連れて、城下町へ買い物へ向かう。そして「爆発岩の粉末」や「黒輝石の粉末」など火薬の原料を買い、自己流で爆弾作りをはじめた。でも、一生懸命がんばったのに、わたしの爆弾はきちんと爆発しなかつたのだ。

どの本に載っている製法を試しても、思いどおりにはいかなかつた。

簡単にはあきらめられなくて、わたしはより一層爆弾作りに没頭した。

お兄様はカンカンになつて怒つたわ。

『お前はなぜ、そんなに爆弾が作りたいんだ!』つて。

だって、爆弾があればお兄様のお役に立てる。それに爆弾作りからは学ぶことが多くて、研究すればするほどハマつてしまつた。

——そして気がついたら、わたしは『変人姫』と呼ばれるようになつていた。
万年火薬臭くて、服はボロボロ、髪はぐしやぐしや。仕方ないわ。十八歳から二十三歳になる今まで、わたしは研究一筋だったんだから。お洒落に興味を持つ余裕もなかつた。

みんなは楽しそうに、汚れた恰好をするわたしの悪口を言つた。妾腹(しょうふく)の姫様は、生まれが悪いせいか、行動まで妙ちきりなんだつて。

こんなつもりじゃなかつたんだけどな?

今頃わたしの爆弾のおかげで、カルターネの土木工事は華麗なる発展を遂げているはずだつたのに。

「あ、れ……?」

わたしは軽いめまいを感じて、おでこを押さえた。

いつからだろう、爆弾のことを考えると、めまいがするようになつたのは。わたしはめまいをこらえて、長椅子に横になつた。頭が重たくて仕方がない。

気分の悪さにため息をついた、そのとき——
「リーザ！」

部屋の扉の向こうから、わたしを呼ぶ声が聞こえた。

わたしは慌てて起き上がり、ふらつきながら扉を開けた。そして、驚きで目を見開く。「おにい……さま?」

わたしが住んでいるのは、城の敷地の片隅にある、かつて物見台として使われていた高い塔。多忙なお兄様が、わたしのいる塔まで会いにくるなんて。一体どうなさつたの

だろう。

「リーザ、お前をこんなところに閉じこめて、すまなかつた」

「閉じこめる？」

お兄様の言葉を繰り返した瞬間、ぐらりと視界が歪む。わたしは昔から、この部屋で暮らしていたのではなかつたのかしら。一体いつ『閉じこめられた』の？

思い出そつとするが、頭がぐらぐらして、よくわからない。

「話があるんだ。やつとお前を託せる男を見つけた」

お兄様が、わたしの部屋に足を踏みいれて言う。

「なんの、はなし、ですか？」

わたしはかすれた声で聞き返した。

言葉が、うまく出てこない。お兄様に聞きたいことがたくさんあるのに。わたしは一体、どうしてしまつたの？

「お前の降嫁先が決まつたんだよ、リーザ。レオンのところだ……」

びっくりするほどやつれ果てたお兄様が、そう言つてぎゅっと目をつぶつた。お兄様の苦しげな表情に、心の奥がざわざわする。

何か言つてさしあげたいのに、頭が働かなくて、何も言えなかつた。

お兄様の白い手袋に包まれた指が、わたしの頬を撫でる。

ああ、お兄様にこんなふうに撫でてもらうのは、久しづりだ。

そう思い、わたしはゆっくりと目を閉じた。

わたしの脳裏に、銀色の二つの月が浮かぶ。不思議、綺麗な、丸い月……

なんで月が、二つ浮かんでいるのかしら……？

やがて、意識は深く沈んでいった。

——わたし、お嫁に行くことになつたんだ！

そう思いながら、わたしはむくりと起き上がつた。

あれ？ いつの間に長椅子で眠つてしまつたんだろう。最近、急に眠くなることが多いなあ……

お兄様は、いつ帰つたのかしら。

ぼーっと考えていたけれど、不意にどうでもよくなつた。

そんなことより、お兄様が決めてくださつた旦那様のことを考えよう。

わたしの旦那様になるのは、王立騎士団、国境警備軍総指揮官を務めておいで、レオンハルト・ローベンベルク将軍。この国最高の武人のお一人に数えられる方だ。

レオンハルト閣下は極北の秘境レヴォントリの巫女みこを母に持つという。そして国境の街ローゼンベルクを統治する侯爵家の当主様でもある。

わたし、実は子どもの頃に、レオンハルト閣下に会ったことがある。とても優しく接していくだけで、以来、たまにお姿を見かけるたびに、胸をときめかせていた。声をかける勇気はなくて、見つめているだけだったけれど。

わたしはため息を吐いて部屋の中を見回した。

テーブルの上には、お兄様が届けてくださった、彼からのお手紙があつた。

『リーザ様。至らぬこともあるかと思いますが、今後ともよろしくお願ひします』

それだけ書かれた、そつけない手紙だ。

でも、このそつけなさが、軍人らしくて素敵。

水のような冷たい容貌よもようで『氷将』と呼ばれるレオンハルト閣下は、貴族の令嬢やお城の侍女たちの憧れの的。でも、仕事一筋で近寄りがたい存在として扱われ、ずっと独り身でいらした。

嘘みたい。ずっと憧れていた最強の将軍様の、お嫁さんになれるだなんて。

お城では顧みられないわたしだけど、実は世界で一番幸せな女の子なのかもしれない。

そう思いながら、わたしは飾り気のない手紙に、そつと口づけをした。



◆

国王陛下に結婚話を持ちかけられてからわずか半月後、王都で結婚式が執り行われた。リーザ姫は、豪華絢爛なドレスを着て、纖細で美しいベールをかぶっている。

私にはよくわからないが、侍女たちが褒めていたので、あのドレスは大層綺麗なんだろう。

式の間、私は、異常なほど緊張していた。一方のリーザ姫は大人しくしてくださつていたので、ほつとした。お約束どおり、新郎の挨拶は囁きまくつた。

リーザ姫を私に押し付けることに成功した国王陛下は、式の間中、上機嫌。厄介払いができたからだろう。

リーザ姫は将軍レオンハルトという名のなんでも屋に押し付けた。

——これにて安泰。カルター國の支配者階級の方々は、正しい判断をなされた。私にとっては大迷惑な話ではあるものの。

式が終わると、花嫁は着替えのためにどこかへ連れていかれた。

ああ、疲れた。しかし、リーザ姫がどんなお嬢さんなのかさっぱりわからない。まあ、

彼女はまだ若いし、世間も知らないだろうから、私が大事にしてやらねば……もし、と
んでもないわがまま娘だつたら、どうしよう。

「レオン。式の直後に申し訳ないが、これから軍事会議に顔を出してもらえないか
ボーッツとしていた私の控室に、陛下が顔を出す。

それつて、今、私に頼むべきことなのだろうか。そう思つても、ほかならぬ陛下の頼
みだ。私は頭をボリボリかきながらうなずいた。

「はい、この花婿衣装のままでいいですかな」

「衣装なんかなんでもかまわない……レオン」

陛下が私のすぐそばに歩み寄る。それから、麗しい顔を私の耳に寄せて囁いた。

「どうか、リーザを頼む。お前にしか、あの子の未来を託せない」

思いのほか深刻な聲音に、私は驚いて顔を上げた。紫紺の瞳に切羽詰まつた光が浮か
んでいるのを見て、言葉を失う。いつも薄笑いを浮かべている陛下らしくない。
陛下はすぐに私に背を向け、入り口に待たせて近衛隊員たちに囲まれて部屋を出
ていつてしまつた。

「お待ちください陛下、会議の場所がどこか聞いておりませんぞ」

そうだ、花嫁のことをだれかに頼もう。今頃、一人で心細い思いをしているかもそれ
させてくれてもいいのに。



「リーザ様には、王都にあるレオンハルト・ローゼンベルク侯爵のお屋敷に、先に向かつ
ていただきます」

質素な服に着替えさせられたわたしは、侍女の言葉に、ホッとしてうなずいた。お式
が終わつてからずっと放つておかれ、お城に帰つてもいいのか、それともレオンハル
ト閣下が迎えにきてくださるのかわからず、不安になつていたところだつた。

「あの、ここで待つていいの? わたし、どうしていいのかわからなくて」
「はい、ローゼンベルクの方がお迎えにいらっしゃると思います。あ、そうそう。
今宵、おしとねに入られましたら、リーザ様のほうから『旦那様、帯を解いてください
ませ』と申し上げてください。ふん。閣下はさぞ、積極的で奔放な娘だと驚きになるこ
とでしよう。そのあとはすべて、閣下にお任せになりますようにな」

侍女がつまらなそうにそう言つた。

「それはどういう意味?」
「どうもこうもありません。初夜のご挨拶です。女としての常識ですよ、リーザ様」

女としての常識……それは残念ながら、わたしが持ち合わせていないものだ。

侍女の言葉は、お兄様が教えてくださった内容と同じだった。初夜の場で何をすればいいのかとお兄様におうかがいしたら、お兄様はなぜか耳まで真っ赤になられて『レ、レオンハルトに帯を解いてもらえばいい。あとは彼に任せるんだ。いいね、リーザ』と教えてくださった。そのことを思い出し、わたしは侍女にうなずいた。

「わかつた、ありがとう。もう下がつていいわ……」

降嫁が決まってからというもの、以前から冷たかった侍女たちがますます冷たくなつた。わたしが閣下に嫁ぐのが面白くないのだろうと薄々わかっていたものの、嫌われるのはやはり心が痛いものだ。

結婚式の日の花嫁つて、こんなに寂しいものなのだろうか。

侍女が部屋を出でていった直後、力強くドアが叩かれる。わたしは驚いて飛び上がる、弱々しく返事をした。

「申し訳ない、遅くなつて! お迎えに上がりました。奥方様、わたしは閣下の副官の

ヘルマンと申す者です」

扉を開けたのは、驚くほど大柄な銀髪の男性だった。

「こ、こんにち……は……あ、あの……」

わたしは知らない人が苦手なのだ。うまく言葉が出てこず、椅子の上で縮こまる。

「あ、失礼。いきなり大男が現れたら驚きますよね。こんなナリをしておりますが、私は熊ではなく一応人間です。さ、奥方様、お手をどうぞ」

ヘルマンさんが、おどけたように一礼する。いつもイライラしている侍女より、ずっと優しそうに見えた。わたしは少しだけホッとする。そして、ヘルマンさんに手を取り、馬車に乗せられて式の会場をあとにした。

「閣下は本当にお忙しくて、式のあとですぐに軍事会議に入つたんです。でも、会議が終わつたら奥方様のところに戻られますからね」

移動中、ヘルマンさんは明るい声で色々と話しかけてくださった。わたしは貴族の館が立ち並ぶ通りを眺めながら、ヘルマンさんの言葉にうなづく。

「閣下のお屋敷は質素ですが、きっと落ち着きますよ」

今になって、わたしはだんだん不安になつてきていた。わたしはお城から出たことがほとんどないし、まともに話をしたことのある男性は、お兄様と乳兄弟のヴィルヘルム

くらいだ。

心細さでじんだ涙をぬぐい、わたしは精一杯明るい声で親切なヘルマンさんに答えた。

「ありがとうございます。今日から……閣下にきちんとお尽くします」

ああ、今日からはお兄様ともヴィルヘルム——ヴィルとも、気軽には会えないんだ。

今更、そんな大事なことに気づいて、また涙がじんでくる。

……ううん、今は楽しいことを考えなきや。

初夜つて、旦那様と一緒に寝るのよね。旦那様に抱かれて寝るはず。ちゃんと事前に恋愛小説を読んで学習しているから、知っている。あの本は頭のいいヴィルが『これら……お前に読ませてもいい……』って、選んでくれた小説だから、内容も信用できると思う。

一緒に寝たら何をお話ししようかな。わたしは動物の話をするのが大好き。元気いっぱいしつぽを振る犬や、のどを鳴らして甘えてくる猫、大空をばたく鳥。どんな動物も大好き。自分も動物になつてみたいと夢見ることもよくある。一匹の小さな獣になつて、カルターの大自然を思いきり走り回りたいなつて、ぼんやり想像をするのも大好き。閣下は動物はお好きかしら。お好きだといいな……

「さ、奥方様、ここがローゼンベルク家の公邸です」

お屋敷に到着すると、五十歳くらいの女性が出迎えてくださった。

「はじめまして、奥様。私、こちらのお屋敷で働いている侍女です。まあ、こーんな可愛いお姫様がお嫁に来てくださるなんて、閣下は果報者ですこと」

大柄な女性が満面の笑みを浮かべて言つた。

広いお屋敷の中を案内してくれ、寝室と、そことつながる湯殿の場所を教えてもらつた。ヘルマンさんも彼女も本当に親切で、驚いてしまう。

作つてもらったスープとお茶をいただいて、わたしはようやく落ち着いた。

「お風呂に入られたら、このお部屋で旦那様をお待ちくださいね。私は朝、またご飯を作りにまいりますから。何があつたらヘルマン様か、警護の騎士様にお申しつけください」「あ、ありがとうございます」

優しく笑いかけてくれた彼女に心から感謝し、お風呂で体を念入りに清めた。

「あら……？」

だが、体を清めたあと、用意していただいた寝巻きを着ようとして、わたしは首を傾げた。ずいぶん薄いし、すぐにズルズルと脱げてしまう。わたしは帯を頼りなく卷いて寝台にちよつと横になつた。今日は慣れない華やかな場

にいたせいで疲れてしまったのか、頭が重い。わたしはゆっくり目を閉じた――

「…………あら？」

いつの間に眠っていたのだろう。誰かが毛布をかけてくれたらしい。

わたしは目を開けて上半身を起こした。そして、部屋のすみにある机に向かっている人に気づき、口元を押さえる。

そこにはレオンハルト閣下だった。閣下が戻っていらしたのに、わたしはぐうぐう眠っていたのだ。

わたしはしばし、暗い明かりに照らされた閣下の横顔に見とれた。きらめく銀の短髪に、たくましい体つき、切れ長で水色の目、厳しくも端整な顔立ち。わたしの亡きお父様に『氷将』という二つ名を贈られた美貌は、年を重ねてもまるで衰えを見せていない。わたしは意識がぼんやりとしたまま、閣下に声をかけた。

「閣下！」

「ん？ ああ、リーザ様、お目覚め……」

こちらを振り向き笑みを浮かべた閣下が、そのまま凍りついてわたしを凝視する。なんだろうと思い、わたしは首を傾げた。そして、自分の体を見下ろして慌てた。

「きやあああああああ！」
寝巻きが、大きくはだけてしまっている。どうやら起き上がった拍子に体からすべり落ちたらしい。

胸を殿方にさらしてしまったことに気づき、わたしは悲鳴をあげた。
どうしよう、体を見られるなんて嫌。わたしは自分の大きな胸がコンプレックスなのに。

「ま、待て、大丈夫だ！」

閣下は椅子を蹴つて立ち上がり、さつと横を向いた。

「リーザ様、いま私は何も見なかつた！ 大丈夫だ！」

「う、う、嘘」

「嘘ではない、私は何も見ていない、偶然見えなかつた。ま、まあ、リーザ様はお疲れでしようから、そのまま寝台でおやすみください。私はそのへんの長椅子で寝ますから、大丈夫」

……長椅子で寝る？

わたしは閣下の言葉に驚き、すばり落ちた毛布を引き寄せながら言つた。

「お待ちください、閣下も寝台でおやすみくださいませ。ここを独り占めして申し訳ございませんでした」

わたしは閣下の言葉に驚き、すばり落ちた毛布を引き寄せながら言つた。

「い、いや、別に、私は今夜はリーザ様に何かしようなんて、まったく……あの、もつとリーザ様が色々とお慣れになつたらで」

閣下はなぜか真っ赤になり、わたしから目をそらしておつしゃつた。

旦那様はわたしのことをあまりお気に召していないのだろうか。

だとしたら寂しいな、と思つたとき、わたしはお兄様と侍女に教わつたことを思い出す。

「あ、あの、閣下、わたしの帯を解いてくださいませ」

「えつ」

閣下が、低い驚きの声をあげる。

わたしは頭と胸に毛布をかぶり、お腹のあたりだけを出そうと試みた。だが、毛布でぐるぐる巻きになり、寝台から転がり落ちてしまう。

「きやー！」

床に転がつて足をばたつかせるわたしを、閣下が慌てて寝台の上に抱き上げてくださる。

「リ、リーザ様、何をなさつておいでですか！」

「……ふはっ。あのう、帯を解いてくださいませ！」

毛布から顔を出し、わたしは寝巻きの前をかき合わせたまま、もう一度閣下にお願いした。

わたしの前にかがみこんだ閣下がゴクリ、とのどを鳴らした。

「よろしいのか……あの、本当に？」

「ハイ！」

「意味は……おわかりなのかな」

「ハイ！ どうぞ、今夜からわたしを抱いて寝てくださいませ！」

そう答えた瞬間、わたしは寝台に押し倒され、閣下のたくましい体の下に組み敷かれた。

帶どころか寝巻きまで勢いよく脱がされて、わたしは慌てて胸を隠した。

頭の中が真っ白になる。服を脱がされてしまふなんて、どうしよう……
帶を解いてはもらえたが、殿方に肌をさらすのは耐えがたい恥ずかしさだ。どうしたらしいんだろう。

閣下は何も言つてくださらない。そういうえばお兄様も、このあとに關しては『彼に任せんんだ、いいね、リーザ』としかおつしやつてくださらなかつた……
わたしはおずおずと閣下の精悍な顔を見上げた。
「あ、あの、リーザ様がそのようなお気持ちでいてくださつたのなら、私は嬉しい」

「えつ、嬉しいのですか？」

「え、ええ、それはまあ……驚いたけど、嬉しい。泣いて嫌がられるかと思っていたから」
閣下のお顔はとても優しい。こんなに優しい顔で殿方に見つめられたのは、はじめてだ。
そうだ。どきどきしすぎて頭から飛んでいたけれど、閣下とお話ししたいことは、もう
う考えてあるじゃない。わたしは胸の高鳴りを必死に抑えて、閣下の水色の目を見て問
いかけた。

「あの、閣下。動物はお好きですか？　た、たとえば、えつと、獣になつてみたい、とか……」

「いえ、獣じみた真似は決してしません！　今夜は私史上、最高に紳士として……失礼」
閣下はわたしの話をさえぎり、羽織つていた夜着を脱ぎ捨てる。無駄のない彫刻のよ
うな体があらわになつた。

なんで閣下まで脱ぐのだろうか？　わたしが服を着ていなかから？
腕と胸を隠しつつ考えこんでいると、閣下に抱きしめられた。

大きななくましい体のぬくもりに触れ、不思議とうつとりしてきた。閣下はわたしの
頭を抱き寄せ、長い髪を優しく撫でてくださつた。

「リーザ様、ちょっとお体を慣らしましようか」

心地よさにとろけていたわたしは、びっくりして目を見張る。

「えつ、ならす……？」

「ええ、はじめてでいらっしゃるでしようから」

そう言つて、閣下はわたしの両腕を押さえつけた。

むき出しになつた胸が、ふるりと揺れる。突然の出来事に悲鳴すら出ない。

「ん……っ」

唇を唇で塞がれ、わたしは声を漏らした。

口づけをするのは、はじめてだ。しかも肌をさらしたままだなんて。あまりのことに、
心臓が痛いほど高鳴る。

「力を抜いてください、リーザ様」

緊張で体を硬くしたわたしの腿に、閣下の手がかかる。軽々と足を開かれ、わたしは
がくぜんとして悲鳴をあげた。

「いやあ！　そんなところ、見ないでえ……っ！」

必死に膝を閉じようとするのだが、閣下の力が強くて逆らえない。

「大丈夫です、痛いことはしないから」

「いや、何するの、怖い、怖い……っ」

閣下は大きな体をかがめ、もう一度、口づけをしてくださつた。

「ん、ふ、っ」

舌先でそつと唇を舐められ、体の芯がゾクリと震える。

このような場面では、妻としてどう振る舞えばいいのだろう？

わたしはゆつくりと口を開け、閣下の舌を受け入れようとした。そのとき——

「んう……っ！」

唇を塞ふさがれたまま、わたしは声をあげた。

わたしの秘所に、閣下の指が触れたからだ。湿つた足の間に太い指が沈み、ちゅくつて——

という音を響かせる。

今まで感じたことのない、得体のしれない何かがわたしの体を震わせた。

閣下の手つきはとろけるように優しい。けれど、こんな恥ずかしいことをされるなん

て——

「いや、っ、ダメえ……そんなところ、触つちゃダメ……」

「大丈夫です、リーザ様」

「だつて、だつて、汚いから……ん、ふ……」

再び唇を塞ふさがれ、わたしはぎゅっと手のひらを握つた。

お兄様はわたしに説明してくれなかつたが、だれもがこんなことをするのだろうか。わたしは恐る恐る閣下にうかがつてみた。

「ね、ねえ、こんなこと、皆さん、なさいますの？」

「ええ」

閣下が、低い声で短く答える。落ち着いた声なのに、少し余裕がないようにも感じられた。

「しますよ、だれでも。大丈夫。だれもあなたに説明していなかつたのなら、申し訳ないが」

閣下の指が、再びぬるりとわたしの奥に沈んだ。わたしの体の震えがひどくなる。

「ひ、っ、本当に？……んあつ、や……っ、やあつ……！」

視界が汗と涙でにじんだ。

「うーん、やはり、ちょっと狭いかな」

「……っ、うう……っ」

素肌が触れるだけでも緊張するのに、こんなことまでされるなんて。

閣下の指が、わたしのなかをゆつくりと行き来する。

「はあ、は……っ」

つぶつて、閣下に身を任せる。

「失礼、リーザ様。二本入れると苦しいですか」

「には……ん……？ あっ、あー……ツ」

そのとき、体がかつ、と燃え上がつた。

閣下の二本の指が、わたしのなかに入つてくる。そしてわたしの小さな芽のような部分を擦り、グチュグチュと音を立ててなかをかき回した。

わたしは少し腰を浮かせる。体が熱く、痺れて、疼きが止まらない。わたしの反応に満足したのか、閣下は指をズルリと抜いた。

「ひあ、っ」

指が内壁を擦ると、反射的に体が跳ねあがるほど快感が走る。

「気持ちいいですか、リーザ様」

「わ、わから……な……い」

朦朧としたまま、わたしは閣下の鋼のような腕に手をかけた。すると閣下の分厚い胸に、わたしの硬くとがりはじめた乳房の尖端が触れてしまう。恥ずかしい。隠そうとして胸を手で覆つたが、閣下は優しくそれをどかした。口づけとともに足の間に指を這わされて、もう何も考えられなくなつた。

「もう少しだけ慣らしていいかな」

「な、なにを、ひ、っ」

グチャグチャに濡れたわたしの足の間に、閣下が再び指を差し入れた。

「あ……ああ……」

秘部が襞のように閣下の指に絡みつく。わたしを見つめる閣下の額に、一筋の汗が伝うのが見えた。

「痛いですか、リーザ様」

「い、痛くは、あ……」

わたしは涙に濡れた顔を、手で隠した。体のなかをゆるゆると攻められる感覺に声をあげ、反射的に腰をくねさせて、閣下の指から逃れようとする。

「いやあ、っ、あ、っ、あつ、ダメ……」

じわじわと絡みつくような熱さに苛まれ、わたしは腰を浮かせて首を振つた。

「ずいぶんと、感度がよろしいな」

嬉しそうに閣下がおっしゃつた。

わたしは恐る恐る目を開け、彼の水色の瞳を見つめる。

——そして、本能的に悟った。わたしは今から、この人に食べられるのだ、と。
「か、閣下、あの」

もう、これ以上のこととは許してください。

そう言おうとしたとき、閣下がわたしを抱きすぐめておっしゃった。

「申し訳ない、リーザ様。もう、我慢できそくなくして」

むき出しのわたしの乳房が、閣下の分厚い胸に押ししづぶされる。

抵抗を試みて足を閉ざそうとしたが、閣下の膝にあつさりとこじ開けられた。

「ひっ」

「今から姫様を抱きます。そのまま私に身を委ねてください」

わたしの両足を肩の上に抱え上げ、閣下が顔をわずかにほころばせた。

こんなに恥ずかしいことをしているのに、幸せそうな笑顔だった。

閣下の笑みを見て、わたしのこわばつた体が、わずかに緩む。

「リーザ様、痛かつたら言つてください」

「あ、あ……」

わたしは首を振つて目を閉じた。

この、体の芯に脈打つ熱はなんなのだろう。わたしはこれから、どうなつてしまふのだろう。

「は、あ……」

閣下の足の間で反り返っていたものが、濡れそぼつた秘部にあてがわれたのがわかつた。そのまま、すさまじい圧迫感と共にそこが押し広げられた。

「つ、あ、やあっ、痛い……！」

ミチツ、という音を立てて、体を開かれる。

薄目を開けたわたしの視界に、閣下の汗ばんだ胸が映つた。

「んあ、つ」

ぐちゅぐちゅと恥ずかしい音が響く。押しこまれた大きなものが不意に抜かれ、また入つた。閣下が、濡れたわたしのなかをゆつくりと行き来しているのだ。わたしは必死にもがいた。

「いや、いや、やめて……無理……体、裂けちゃう、つ」

「大丈夫、大丈夫だから」

わたしの頭を抱き寄せ、閣下がとても優しい声でおっしゃつた。

「リーザ様、力を抜いて。私につかまつていい」

歯を食いしばっていたわたしは、ふと気づいた。

そうだ、閣下も汗だくだ。つらいのはわたしだけではないのかもしない。

わたしは勇気を振り絞って、足をそうっと開いた。

「ありがとう。リーザ様もそのほうが痛くないはずだ」

「んっ」

奥深くまで、閣下のものがねじこまる。

わたしはぎゅっと目をつぶり、体が裂けぬことだけをひたすら祈った。

「う、う、も、これ以上、無理……」

「大丈夫です、ほら」

なだめるような口調で閣下がおっしゃって、わたしの硬くなつた胸の尖端をキュッ、とつまんだ。

「ひあっ」

驚くほどの刺激が、体の芯に走り、わたしの体が跳ねた。

「こうすると、もっと濡れるはずだ」

咥えこんだままだった閣下のものが、ぐいっとわたしの奥を突いた。

「あ、あ、こんな深いの、ムリ……」



わたしは涙に濡れた顔を隠すのも忘れて、閣下の腕を必死に握りしめる。

「なんて素直な可愛らしいお体をなさつてゐるんだろう、リーザ様は」

閣下が、わたしを貰いたまま、わたしの体をぎゅうっと抱いた。そしてわたしの頭に優しく頬ずりし、再び動きだす。

くちゅくちゅという音が聞こえる。わたしの秘所が閣下のものを舐めているみたいで、たまらなく恥ずかしい。

「閣下、これ、恥ずかしいっ……やめ、て」

閣下が大きな手でわたしの顔を包み、口づけをしてくださつた。

どうようもなく体がほてる。くちゅり、とひときわ大きな音が、わたしの足の間から響いた。

「ん、う、うつ」

先程よりも情熱的に舌を絡められ、わたしはただ閣下を受け入れた。体を貫く閣下のものが、大きくて熱くて、少し怖い……

「リーザ様は、私こうするのはお嫌か」

「え、い、嫌じやない……怖い、だけ……」

怖いのはたしかだが、大丈夫かもしけない。

こんなに奥まで閣下を受け入れても、怪我一つしていないではないではないか。

わたしは思いきつて、閣下の背中に手を回した。すると、閣下は小さく笑う。

「よかつた。私もあなたをもう離したくなくなつた」

「んつ、ふ……」

再び閣下に口づけられ、わたしは目をつぶつた。口内に差し入れられた舌を、同じように絡め返す。

「ん、うつ、ふう……う」

淫猥な水音が激しさを増した。わたしは背を反らして、閣下の口づけを無我夢中で受け止める。閣下の指が優しくわたしの腿を開き、わたしたちはより一層、深く絡み合う体勢になつた。

閣下の巧みな動きで体を上下に揺さぶられながら、内壁を幾度も擦られる。わたしはその甘い刺激に耐えた。

「あ、ああ……この音、恥ずかし……」

くちゅくちゅという音が、静かな部屋に響き渡つて、たまらなく恥ずかしい。わたしは足の間に力をこめ、なんとかその音を止めようと空しい努力を続けた。

痛みよりも、体のなかで膨らむ熱を持て余すことのほうが、苦しくなってきた。

「ああ、あ……っ、あ、つ、閣下の、熱い、い……」

「リーザ様、ああ、なんてお可愛らしい方なんだ」

「どれほど時間が、閣下に抱かれていたのだろう。

朦朧としたわたしの耳元で、不意に閣下が「すまん」とつぶやく。

わたしのなかの閣下のものが硬くこわばり、どぶ、と熱いものが弾けた。

「んあ、あ、あ、あああっ」

わたしは叫びながら閣下の体にすがりついた。閣下はわたしを苦しいくらいに力強く抱きしめてくださる。

しばらくして、彼の腕の力がそっと緩んだ。

「すまんな、リーザ様、手荒にして……つい、夢中になりすぎた」

「だいじょうぶ、です」

閣下に体を預けたまま、わたしはかすれた声で小さく答えた。

必死で泳いでようやく陸に這い上がるがつたときのような疲労感が、わたしを包む。

「つ、ふ……」

行為の最中に比べればずつと紳士的な口づけが、唇に降つてきた。

夫となつた彼の体の熱をうつとりと味わいながら、わたしは身を委ねた。

すっぽりと『旦那様』の体に包まれて、生まれてはじめての不思議な安心感を味わう。

「リーザ様からは、本当にいい香りがするな……さ、こちらにおいて」

わたしは素直にうなずき、旦那様の広い胸に頭をのせた。旦那様の腕が、わたしの背中をそっと抱き寄せる。

「ああ、たしかにわたし、旦那様に抱かれて眠るんだわ……」

「そう思いながら、わたしは目を閉じた。

第二章

旦那様と一緒に、王都の公邸から国境の街ローゼンベルクへやつてきて、三日。わたしは順調にこの街での暮らしに慣れはじめている。

ローゼンベルクは王都からとても遠かつた。さひょう砕氷船に乗つて海を渡り、一週間も旅し

たの。この海路が最短経路なんですって。

ここカルター王国は、大陸から東に突き出した半島だ。大陸に接する西側に山脈があり、残りの三方は海に面している。『国境』と呼べる場所を有するのは、西の山脈の合間に位置する国最北の地ローゼンベルクの街だけ。旦那様は、西のアルデ王国、極北地方に広がる大氷原との国境を守る将軍閣下とうわけ。

国境を長年守り続けている旦那様は、すごく頭がいいし、将軍としての能力がばつぐん。最強なのに威張らないところなんて、本当に素敵な人だなって思う。

人に厳しいお兄様も、旦那様のことは信用なさっているみたい。

そんな旦那様と一緒に船に乗るのは、楽しかったなあ。

新婚旅行みたいだってうきうきしていたら、あつという間にローゼンベルクに着いたやつた。

旅を思い出しながら居間で機嫌よく旦那様の襟巻きをたたんでいたら、庭の門が開く音がした。

「旦那様、お帰りなさいませ！」

わたしは玄関から、雪の積もったお庭に飛び出す。

仕事を終えて戻ってきた旦那様が顔を上げた。無表情だった彼は、わたしを見ると優しい顔になる。

「リーザ、変わりはなかつたか」

「はい！」

リーザと呼び捨てにされて、なんだかもじもじしながら、わたしは表情を緩める。

リーザ。そう。わたしは旦那様のリーザになったの。

旦那様のたくましい腕を取つて、暖かな居間に引っ張っていく。

「こら、リーザ。あまり急ぐな

わたしは旦那様を振り向いてほほえみ、背伸びをして彼の頬に口づけをした。

ひげが少しチクチクする。わたしの心に、かすかな快楽が湧く。

このなんとも言えない心地よさは、旦那様に触れたときにしか感じない。旦那様がわたしに教えてくださつたものだ。

「リーザ。ここは王都と違つて治安がよくないから、家の外に勝手に出ないように」「はい、わかりました」

力いっぱい抱き寄せられ、わたしは旦那様の胸に頬を押し付ける。肩のあたりが、ひんやりと冷たかつた。

「あの……お寒かつたでしよう……」

「え？ ああ、雪がすごかつたからな」
「夕餉は取られましたの」

「うん、兵や将官たちと食べた」

こちらに来てから、旦那様はいつも外でご飯を召し上がつて、家に戻られる。

わかつてたけど、今日はまだだといいなど淡い期待を抱いていた。

地元の女性たちがわたしを訪ねて、この地方のスープの作り方を教えてくれたのだ。スープは信じられないくらいおいしく作れた。

雪の下に生える辺境の珍しいキノコをたくさん入れたスープ。

旦那様にも食べてもらいたかったが、食事が済んでいるなら仕方がない。

「どうした」

「いいえ」

わたしは首を横に振りつつ、居間に入った。

そうしたら、旦那様は鼻をひくつかせて、厨房に足を踏み入れる。

「あ、おいしそうなものがあるな」

旦那様は鍋のふたを開け、わたしを見た。

「リーザが作ったのか」

「は、はい！」

「じゃあ食べようかな」

薄い水色の目を細め、ほほえみかけられる。わたしは天にも昇る心地でスープを温めて、カップによそった。

最近は爆弾作りを忘れるくらい幸せで、毎日が夢のよう……
機嫌のいいわたしを、旦那様がそつと抱き寄せてくれた。彼の体の熱が、わたしに伝わる。

「あの、スープは？」
抱擁を解いてもらえず、わたしはおずおずと旦那様を見上げた。

「旦那様、あの……」

「スープはあとでもらおう。まずは、リーザを味わつてからだ」
わたしはあまりの恥ずかしさに、うつむいた。
でも……わたしも、そのほうが嬉しいかも……

寝台で唇を塞がれ、服を脱がされる。気づけば、わたしは旦那様に跨っていた。

ふさ

まなぶ

どうしよう。こんなふうに旦那様の上にのるのははじめてだ。
いつもと違う体勢に戸惑い、わたしは旦那様を体のなかに受け入れつつ、目を泳がせた。

「どうした」

「旦那様のお声は優しいけれど、どこかからかっているようにも聞こえる。
「ん……っ、あ、あのっ」

旦那様の肌に触れているだけで、体の芯がしつとりと濡れてきた。
わたしのすごく深いところを、旦那様は容赦なく笑きあげてくる。
身をくねらせたくなるほどの気持ちよさだ。

震える腕で熱い胸にすがりつき、わたしは上から旦那様の顔を覗きこんだ。
「あの、旦那様。わたし、旦那様にのるの、上手にできているでしょうか?……」

「動いてくれないと、わからないな」

旦那様は意地悪だ。

わたしは口をへの字にし、旦那様に跨つたまま、おずおずと体を前後させた。
体の疼きに合わせて、淫らな声が漏れてしまいそうになる。

旦那様の分厚い肩をつかんで、必死に声をこらえた。

屋敷に来てすぐに教えてもらったことを思い出し、旦那様に聞く。

「あ、あの、旦那様、……っ、んっ、このお屋敷、壁が薄いんでしょう?
「薄いよ、見るからに薄いだろう」

「ひ……っ、あ、ああっ」
旦那様がのどを鳴らした。からかわれているのはわかる、のに、体が……

「ひ……っ、あ、ああっ」
旦那様にお尻をつと撫でられ、体温が上がる。もっと旦那様が欲しくなり、わたしはひたすら不器用に腰を動かした。ふだん旦那様がしてくださるように、抜き差しをしてみようとする。

だが途中で、乳房がみつともないくらい揺れていることに気づき、慌てて片手で隠した。
下から胸を見られるなんて、恥ずかしき。
「リーザ、なぜ隠す。最高の眺めだつたのに」

「あ、の、恥ずかしい、から」

「ほら、もっとその美しい足を開いて、私を気持ちよくしてくれ
「やあ……っ、そんなの、できません……ん、あっ、あっ、ああ……」

旦那様がわざかに腰を持ち上げると、クチュツという音を立て、わたしの秘部が旦那様のものに絡みつく。
どうしてこんなに反応してしまったんだろう。少し動くだけで、声が漏れるほど気持ち

これ以上何かされたら、外に聞こえるほど大きな声を出してしまいそうだ。

「も、ゆるし……て……」

わたしは哀願し、旦那様の体にしがみついて口づけする。

旦那様がわたしの髪を撫で、少しのどを鳴らした。

「すまん、すまん。あまりにも反応が可愛くて、つい」

旦那様は体を起こし、わたしの顔を引き寄せて口づけをしてくださった。

突然の激しい口づけに、わたしの体の芯がきゅんと締まる。

「ふあ、っ、んっ」

「お前は、声も可愛い。何もかも可愛すぎる」

唇を離し、旦那様が低い声でおっしゃった。

そのまま、ひょいと両腕で抱き上げられる。旦那様自身が抜かれ、わたしの体との間に

未練がましく一筋の糸を引いた。

わたしはまだ離れたくない。もつもつと旦那様とつながっていたのに……

「よし、もう少しお前の可愛い声を聞こう」

わたしはそのまま寝台の上にそっと横たえられ、大きく足を開かされた。

手で濡れそぼった裂け目を隠そうとするが、旦那様は当然許してくださらない。

わたしの手首を掴んで、指に何度も優しく口づけ、旦那様はおっしゃった。

「リーザ、私が王都で見た白薔薇は、お前みたいに美しい花だった」

「い、いや、違う……わたし、そんなに綺麗じゃ……ん……っ」

「お前は綺麗だよ。甘い香りがして、真っ白で、芯は桃色に染まっている。白薔薇そのものだ」

旦那様の熱い塊が、焦らすようにわたしの秘裂をゆっくりと貫いた。

溢れだした蜜が、淫らな水音を立てる。

その音を聞いているうちに、わたしの体の芯がじんじんと疼きはじめた。

「ん、あつ……ああ、旦那様。だめ、気持ちよくしないで」

声が出てしまうからと訴えたのに、旦那様に動かされてしまったら、無理。

手近にあった小さなカッショングを顔に押し付け、声を抑えた。

だがそれも取りあげられ、両手首を押さえられてしまう。

「ん……っ、あ、あああ、っ」

だめ。声を我慢できない。体の芯が溶けてしまって

わたしは旦那様に激しく突きあげられ、ひたすら体をのけぞらせて快樂を逃そうと

立ち読みサンプルはここまで

55 氷将レオンハルトと押し付けられた王女様

した。

「ん、ううつ、は、あ、旦那様、あ……ツ」

「ここはどうだ、リーザ」

旦那様がからかうような声で囁く。ささや

「ひっ」

裂け目の縁にある小さな芽を指でいじられ、体がビクンと跳ねた。

「んっ、やあ、ふ、あ……っ」

秘裂の入り口を撫でながら、旦那様が目を細める。

「そうか、なかも外も、どちらも感じるのか。美しくて貪欲なんて最高の奥方だな」

旦那様が満足そうにおっしゃり、ますます硬くなつたものでわたしのなかを激しく突きあげた。

「ひあ、あ、あああつ、は、あ、やだあ……つ、口塞いでえ、つ」

旦那様はわたしを搔き抱き、唇を重ねてくださつた。

わたしはあまりの快感に、熱く反り返る旦那様のものを、きつつきつく締めあげる。たくましい体に無我夢中ですがりつき、旦那様の腰にわたしの足を絡めた。そして舌も絡め、快楽の奔流に押し流されまいと足に力を入れる。

「ん、くつ、ふ……うつ」

旦那様がわたしの頭を抱き、苦しげな声で名前を呼んだ。

「リーザ」

「んっ、だんなさ、まあ……つ、あ、ああ」

「く……つ」

旦那様が苦しげに息を吐く。

わたしのなかで、旦那様のものが信じられないほど熱くなつて震えた。体がぐくぐくと震える。旦那様を呑みこんだ膣内が、耐えがたいほどに痙攣する。

「あ、あ……だんな、さま……っ」

果てたあとは、いつも思う。

大きな体の旦那様が、可愛くて、愛おしいって。

しばらく抱き合い、口づけを交わし合つたあと、そつと旦那様が離れた。

「ああん……っ」

するりとという音とともに強い快感が背に走り、わたしは思わず声を漏らす。まるで甘い痺れ薬を呑まされたようだ。